家庭

子母里そーだん

こにし　のぶはち

鎌倉病床感舊記

にぱー　くらべ

おちぶれて　袖に涙のかかる時ほど、人の情の感せらるるものはあらじ、戊辰の亂と歴史家の申すなる慶應四年後には明治元年の五月十九日長岡城落ちて城主牧野公はじめ藩士一同會津指して三百年來住みなれし城下を砲烟に委ねて見返り見返り立退き一里ばかり城下はなれたる所に悠久山として藩祖を崇めて蒼柴神社と稱し、吉野櫻の並木數百株を境内としたる靈山春秋二季の大祭には老若男女の四民參詣歡樂する麓をば、旗を卷き聲を忍びて通り過ぎ、誰ありて此靈山を守らんとするもなく、舊主に供奉して前途覺束なく歩行ゆく樣のいとも哀れなるは、修羅の衢を辛やくに過り拔けて又一つの劍の山に攻めあげらるる心地にて三百年の太平の夢を貪ぼりし罰にやあるとかこつもあり老いたるが幼兒の手を取るもあり少年が祖母の手を取るもあり、嫁御りよーが姑の手を取るもあり、新婚の妻が夫の身の上を案じ煩ふもあり、最愛の孫の初陣に打死にもやせんと思ひ煩ふ老爺もあり、行先を定らぬ母子の細雨を冒して泥濘を素足にて脇差帶べるは士の妻の守刀か將又ま

さかの時の覺悟の刀が、思へば凄ごき風情にて昨日までは七萬四千石の大藩ならねど又小藩ならぬ士の妻、今は浪人の妻、我夫は君の爲とこそ戰ひもせめ何の犯せる罪ありてかくは運拙なく主從の跡の問ふべくもあらず、我一人は如何に忍ぶも頑是なき此兒の父を呼び叫ぶを見ては足も進まず、戰爭といふことは大閣記か三國志の昔と思ひしに今はまのあたり、我君我夫の身の上、我も亦落行く人の數とは夢か現か夢ならば早く覺めよ、かゝるは兼て、覺悟あるべきを此場にのぞみて不覺と他し人に見咎められじと、意氣地にも口にはいはねど心には士の身の上はどつらきはなしとはなべての心なるべし。

それをも思ひも酌まず昨日まで我々を土百性と慢どり米のなる木か草かもしらで、白らげ上げたるわたがき飯飽までくらひ、山海の珍味限りつくして奢りし天罰しれやとつぶやきしもありしとか、昨日まで旦那旦那とあがめ世辭たらたらなりしが今は主人顏するもありしとか、かはればかはる世の風情、實に唐人が、掌かへすかへさぬが雲となり雨となるよとうたひしも理りなる。そを悟らぬこそこちの愚痴なれ、愚痴こそ人の弱きところなれやとわれも亦悟らぬ一人なりしぞ口惜しかりき時に年十五同年輩のものにして太鼓を打ち喇叭を吹き軍の人の數に加はりしもありしを、われは其頃上の間手近くいはば、藩の內閣家老奉行の諸老臣の會議所の給仕なりしに、元締という役ありて、申されしには、『御上には既に御城御立退き、御家老御奉行も夫々御供我々も是より御供すべけれど、御前達は此場に及んで御用もなし、軍隊に

用なき人口を減らし、兵粮の差支なきを圖らねばならぬ。上樣御居所定まり、御用あるか、又は戰歿者多く、補充の兵士に呼出さるるか、御用は今日限りでない、行先々々の忠勤抽んづべき大切の身で、呼出しのあるそれまでは、祖父母や母の手傳いたして、身を隱くし、百難忍びて君恩に酬ゆる時を待て、これ即御前達が只今の忠孝の道というものぞ」と、いと懇ろに諭されてピューピューの丸の下くぐりぬけてぞ東山腰たどり行き、六十に近き祖母と母夫れに八歳五歳の妹二人三歳なる弟一人逃げゆくに追付き、弟をば背に母は五歳の妹を背に、八歳なる妹は老祖母の手を引き、日の暮るる頃勝母村といふに着き、伯父が蒲原代官つとめし數年間、老祖母が子の如く愛し使ひしといふが、戰爭はじまる頃より「事あらばわが家にぞ

れ、不自由はさせまじ」と、いと忠實に申すにまかせ、冬もの其他當用ならぬ器具ども預けたるを便りに尋ねゆきしに、何事ぞ「官軍より長岡藩士の落人かくまひおくに於ては嚴罰あるべしとの御觸れあれば、今夜は兎も角も明朝は夜明けぬ前に立のきたまへ、非禮といふに少しのゆかりあれば、それへ御供して賴み上げん」と、情あるごとく情なきが如くなる言の葉に老祖母の落膽今も目に見ゆるぞ、此女房の憎く〳〵しき

勝母とはまさる母ならで、母に勝つとの村名にやと、いまならばつぶやきつらんに、子供心に何のわきまへなく、薄ふみわけ林くぐり、人の通ふ道ならぬ、藪や林や谷間を、結句の興に通り拔け、定めの非禮といふに到り、孫右衞門といふに着けば、亭主は山行きの留主といふに、「おかみさん御亭主

の留主に、かくばかり御親切にあづかり、御亭主が歸られて御前が迷惑してはならぬが』と、母が申すと、『いや〳〵氣遣はシャルナ、亭主はおいらにまさる佛心ふかき、人の難義を見逃がす者ならず、ほめこそすれ何で叱るの迷惑のと申すべき、安心なされ、』と申しゝは、官軍に賣りもやせん下心かと、疑ふまでに物凄く思ひしも、頼み切つたる者に見離さるゝ矢先に、緣もゆかりもない他人の餘りに親切なるに心落ちぬも道理なる。偖亭主といふが山より歸へるや、女房の申すを聞けば、『喃とっつあ(山里のことば)かくかくの次第で御前が留主に御ざつた御客を泊めたぞ悦こばしやれ』といふぞいよ〳〵不思議なる、亭主の申すには、『それはよく氣がついただ、城下の衆は味噌氣の者は喰はしやるまいぞ、醬油があるか』など申すを、老祖母は打ち消し、『コレコレ御亭主そのヨーに心配して下さるな、何でもたべるよ、聞けば此村にも官軍の御觸で、落人かくまう事ならぬときびしき達あるとか、我々のために迷惑かけては濟まぬ、何れへなり立退こうによつて、案内だけは御頼み申す』と聞きて亭主は『ソー急がしやるな、官軍の御達しがあればとて、二百五十年からの大恩ある御領主の御家來衆の難儀を餘所に見られるものかい、御祖師樣の冥加にもかなはぬ、マー今夜はユックリ安心して疲勞を直さつしやい、士と百性の違こそあれ。牧樣(百姓の略語なるべし)の御恩受けしは同じこと鍬とればこそ落付きて御供もせですめ、されば一人でも御士衆を御かくまひ申して、責めてもの御恩返しいたさばやと思ふばかりぞ』と、誠こめての慰めごとは、女房のいふ

にもさる慈悲ふかき心の奥のみえて、祖母や母の顔に湛へる嬉し涙、子供心にもらひ泣きしも道理なるかな。

捨る鬼あれば助くる佛もありと、夜もやすゝと眠りあかして、さて今日は如何にすべきと案ずれば、亭主は慰めて『いつまで泊まらしやてもいいだが、聞かしやる通り官軍の調らべありては御互のためでないから、向ふの山に見ゆる小屋はわがものなれば、彼れにて安々忍ばしやれ其内には世も治まり殿様も御歸城旦那も御供長いことではあるまい程に力おとすことはいらぬ、いざ案内せん』と、先に立ち行きつきて、暫し其處にいこいて、あの山は會津磐梯山其山は守門嶽是は何山何川と村を指し谷を示し、別れにのぞみ『誰が來て咎めよーとも我が案内したとはいはしやるな、村人ならばいいが廻しものの來ぬともかぎらぬ、飯は運んで來るが火は焚かしやるな』と、注意に注意を與へて山を下り、毎朝飯を運び、夕には來りて後生話に四方山のはなし、篝火の星の數にもくらぶべきを、われは長岡様あれは官軍の陣所ならんなど打ちまぜて徒然をなぐさひるを例とせしこと凡そ一週間一日も缺きたることなきに、十萬億土の佛は頼むに由なきを、此世の生き佛とは此孫右衛門夫婦をこそ申すべけれ。

抑如何なる人なれば數十年面倒見て取立てしものさへ、官軍の調べをいひ草に、一夜の宿も忍ぶ忍ぶに追立てる仕打に、縁もゆかりもないものが斯くまで親切にしてくるゝとは、日頃信心の大師の化身にやと、非禮村とは誰が名付けしと祖母と母との悦びばなし盡きぬ中、母の弟なる伯父の君

城下より二里南なる高山村正樂寺の住職なるが、戰爭のため往來止めに身も世もあらぬ思ひして與板の西本願寺掛所にありしが、少しく警戒怠るを見て母の身如何にと探し當て來ましゝ時ぞ、再生の心地してくる〳〵坊主の俄小僧に身をやつし引取られし時の嬉しさ、忘れてならじと奥さまくらべの續きくらべ、奥樣と呼ばるるに似もやらぬ夫人もあるに、いろはも知らでかかと呼ばるる山姥にもかかる賴母しきがあるを見れば人の性は敎えにも習にもよらぬものにやと感じき。

夏の蝶あはれや軒にあま宿り

印度土人の家庭生活（承前）

Y. I.

印度人は、一般に親切で快活な方ですから、その家庭の生活にも、やはり此氣質が反射して居ます。

夫から、結婚のことに付て、一言申し上て見ましようか、此國の兒童の結婚法は、まことにわるい風慣なので、之からしていろ〳〵の弊害が起るのでございます。さかし、印度人は割合に親切な感心すべき方法で以てこの惡い制度を實行して居ます。素より年も行かない幼ない女兒が、今まで知ない良人の家族に渡されるのでございますから、時々は悲しい憂い目に遭ふことのあるのは、疑ひもないことではありますが、もと〳〵此女兒たちの自宅に居ります時分には、其母親達が今に姑の許にやれば、直に矯正せられるであろうといふので、大變に氣儘に育てまするのは、寧ろ憐びべきことでございます。